



ジャン＝フランソワ・ミレーのアトリエ

思い出の家、愛情に溢れたミュージアム、ここでは訪問順序を矢印では示していません。偽りのない当時のままの面影と美しい光そして密接さがここを特別な場所としています。

アトリエ (L' Atelier)

この北に面したアトリエでジャン＝フランソワ・ミレーは「晩鐘」「落穂拾い」「鋤を持つ男」「種まく人」「母の気配り」「春」などの数々の傑作を生み出しました。最初は納屋であったこの場所をミレーは月日をかけてアトリエに改造していきました。大きなガラス窓、瓦屋根などは画家が手を加えたもので、元々ここは非常に薄汚い場所で、ミレーは中二階にイーゼルを置いていて本人はこの場所を「蛙小屋」と呼んでいました。

エスパシユー氏によって撮影された「美しきマリー」の写真は晩鐘のモデルとなり当時17歳であった少女の思い出を残しています。イーゼルの上にある彫版画はシャルル・ジャックの息子であるフレデリック・ジャックによって19世紀に製作され、ミレーがアトリエにいる様子を描いています。

カール・ボドメールの息子が所有する写真では、手が加えられる前のアトリエの状態を見る事ができ、ミレーが生きた良き時代を思い起こさせます。

入り口の左には二枚の板が置かれており、そこには英国の評論家が「バルビゾン派」と命名し当時この場所に集っていた芸術に置ける先駆者、同時代を生きた者そして後継者たちの二十四枚の肖像画が並べられています。その反対側にはこの流れを引き継いだ印象派たちの肖像画が並べられています。

ユージェヌ・マッソンによって正確に模写されたテオドル・ルソーの作品とルシアン・レポワットヴァンによるミレーの二枚の模写以外は、このアトリエで展示されている作品は全てオリジナルであります。

食堂 (La Salle à manger)

質素な造りの中には暖炉があり(後にダヴィッド・アンジェールのメダル飾りの複製装飾が加わる)庭と階段に向かって開く窓、六時で止まった壁時計(ミレーの亡くなった時間)。この一室は特に感情を揺り動かします。多くを語らずとも毅然で質素な気分になります。ここは、木靴を履いた画家が質素さの中で妻と九人の子供たち、女中そして時々訪れる友人たちに囲まれて過ごした場所です。

写真、自画像、アシール・ドヴェリアのデッサン、パレット、ミサの本を含む数々の資料の裏には強い感情を呼び起こすものがあり、この髭を生やした画家が常に故郷への郷愁を寄せていた寂しい思いを感じます。

エッチング、版画、デッサン、白の効果を巧みに用いた木炭の素描などは画家の技術を証明するものであり、その腕前は見詰めた一瞬一瞬を伝説的なものに変化させる術を持っています。

注釈: 暖炉の上にはアントワヌ・バーイエとローザ・ポヌールのブロンズ像が置かれています

ミレーは写真技術に魅了されていました。絵葉書や芸術作品の複写をコレクションしており自分の作品も写真撮影の対象になるように押し出していました。画家自身、写真を撮られる事を好み、あまり知られてはいませんが彼自身が撮影を試みたことも何度かありました。国立図書館に保管されている三枚の写真乾板は、デジタル技術を用いて複製されここに展示する事を可能にしました。画家のことを書いている伝記作家もこのことについては一度も語っていません。



ミレーを父親のように慕っていたヴィンセント・ヴァン・ゴッホは「私にとってのミレーとは誰よりも現代的であり、目の前の世界を広げてくれる画家である」と後に語っています。

台所 - ジョルジュ・リシャールの間(La cuisine - Salle Georges Richard)

かつてシャルル・ジャックのアトリエの一つであったこの部屋は、1860年以降はミレー一家の団欒の場となり、現在は展示及び販売スペースとなっています。

ミレーの死後はフォンテーヌブロー城を手がけたガリシによって、色を塗った格天井とイタリア風暖炉が設けられ、ラファエロ風の聖母子像が施されています。

この部屋では絵画、19世紀の古い彫版画、木版画、書籍、絵葉書などを見る事が出来ます。ガラス版画はミレーによる作品でもあります。

ここではテーマに沿った展覧会が三ヶ月おきに開かれます。ここで作品を発表する画家たちはバルビゾン派が築いたフランス風景画の歴史を受け継ぐ現代画家たちです。